

もの有り。蓋し科布特に到るには、天候順なれば約三十日、又張家口に到るには約一百日を要し、日々水草の所在に由て、其の距離を異にす。蒙古界に入れば各一日行程毎に蒙古人の氈幕ありて稍と便なりと。

其の吐魯蕃に到るものは、大道よりすると、小道よりすると有り。小道は即ち十三間房を通じて、之を大道よりするに較れば、三日程の近きと、水草の潤澤なるの利あるも、此地は大風甚しき爲め、通行者極めて少しと。

沿革
哈密は漢代伊吾廬の地にして、明帝の永平年間(西曆紀元六十年代)匈奴を討伐するや、始めて茲に宜禾都尉を置き、屯田を設けて兵鎮としたるが、安帝の永初元年(百七年)之を廢し、順帝の永建元年(百二十六年)改めて伊吾司馬を置き、更に屯田を再興したり。晋代には宜禾縣を、魏代には伊吾廬郡を置き、隋の大業四年(百八十六年)漢の伊吾城の東に新城を築き、名づけて伊吾と稱す。唐の貞觀四年(百三十四年)西伊州と改稱し、都督府を置きて伊吾、納職、柔城の三縣を領せしめ、後西伊州を單に伊州と號す。天寶(七百四十年代)の初め又伊吾郡とし、乾元(七百五十年代)の初め再び伊州と改め、廣德(七百六十年代)の初年、吐蕃(青海)の爲めに陥らる。五代之を胡廬蹟と呼べり。降て元代に至るや、元帝の族威武王、忽(ウエウ)